

# カルシユの足跡を追って

若松 秀俊

◇30◇

二十世紀もおし詰まつた平成十二年の秋深いこ

ろ、九期文乙の宮田正信が講義ノートを土蔵の中

で偶然見つけた旨を、電

話で筆者に連絡してくれ

た。必要な部分をコピー

し、丁寧に糊(のり)付け

製本して送ってくれた。

早速、開いてみた。ノ

ートに記録されたドイツ

語のアルファベットは、

今日の筆記体とは違い、

そう簡単には読めない。

ページをめくるうちに

「ローレライ」の歌詞が

現れた。これなら筆者も

歌詞を全部そらんじてい

る。これをもとに筆記文

字の解説を始めた。そう

の授業の様子が目につか

なかつた。宮田は大阪出身の、俳

諧・俳句を研究する国文

生徒の宮田の生真面目

(きまじめ)さがよく分

かつた。

それにしても驚いたこ

学者で、滋賀大学教授な

とは、かなりきちょうめ

んに彼がノートを取って

に文学博士号を授与され

いたことである。筆者も

かつてドイツ人によるド

イツ語や専門科目の講義

を直接聴きながら、学習

に動んでいた。

ノートの発見と同時に

に、自由題のレポートの

な、自由題の独訳の宿

題があったが、その宿題

に細かく丁寧に添削した

ものがあつた。

カルシユは授業中に自

分の専門の分野に話が及

ぶど、とともうれしう

で、黒板にチョークで図

を添えて講義してくれ

た、と宮田が手紙の中で

語ってくれた。

ところで、カルシユは

松江高等学校在職中に九

十枚を超えるパステル画

ることなく、教師として

紙を生徒に一人ずつ返却

する風景が目につかぶよ

も接してくれた。今も頭

うである。

とところで拙著『湖畔の

夕映え』で何度か登場し

ている九期文乙のあのク

で独文の手紙の書き方を

ラス代表で、自らを誇ら

図解しながら、ドイツの

しげにいつも「高等小使」

歌も教えてくれた。ノー

と呼んでいた白石磯は、

トからは講義の内容が細

陸上クラブの練習で忙し

かくうかがえ、当時の授

業を彷彿とさせる。でき

な授業をカルシユ先生が

してくれたのに、自習寮

に帰って食事を終えると

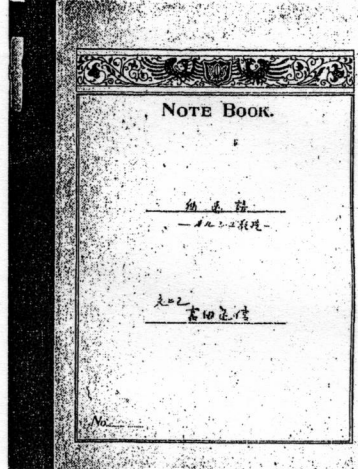
眠くて勉強どころではな

## 宿題を細かく丁寧に添削

### 講義録から

(上)

七十余年前の宮田青年の講義ノート



心より折る次第である。

(東京医科歯科大学大

学院教授) 文中敬称略